「タバンカ祭」畳と鍋蓋が大活躍する奇祭

下妻市大宝　大宝八幡宮

「タバンカ祭」は、秋の例祭[※1]の前に行われるユニークなおまつりで、毎年9月12日と14日の夜に行われます。一三七〇年、大宝寺別当坊賢了院が火事になり、畳と鍋の蓋で火を叩き消したという故事を戯曲化したのが、タバンカ祭の起源と言われています。

儀式は、松明役2名、畳役4名、鍋蓋役1名の7名の白装束を着た氏子の青年が行います。午後7時頃、太鼓の音を合図に祝詞の献上が行われます。神前に畳と鍋蓋を並べ、鍋蓋の上には供物のご飯と冬瓜を一つずつ載せたかわらけ（素焼きの杯）が置かれます。玉串拝礼の後に、7名の氏子たちが畳とかわらけの破片を拾った人は、病気拝殿前に放り投げます。砕けたかわらけが載った鍋蓋を拝殿前の大きな松明に点火し、その火を取り囲んで畳と鍋蓋を石畳に叩きつけます。（この時の「バタン」という音から「タバンカ」の名が起こったと伝えられています。）松明役が両手に松明を持って火の粉を振りまきながら、畳役と鍋蓋役、そして時には参拝者をも追いかけて走り回ります。火の粉を浴びると火の災いを免れると言われており、太鼓の音が響き渡る中、大松明が燃え尽きるまで、追いかけっこが続きます。最後に再び火を囲み、畳と鍋蓋で消火します。この松明の明かりで、12日には境内末社、14日には本社と若宮八幡宮（境内にある摂社[※2]）の御幣[※3]が新調されます。

この珍しい神事は、昔起きた火の災いを繰り返さぬよう、火事を消した畳と鍋蓋を使って火を清めた後に、ご利益があるとされる火の粉を少しだけ浴びることで、火がもたらす良き一面と恐ろしい一面を同時に体感することができる儀式なのかもしれません。また、空気が乾燥していく秋に行うことにも、先人の知恵が込められている気がします。

大宝八幡宮は、七〇一年に藤原時忠[※4]が宇佐八幡宮を勧請した神社とされています。また戦勝祈願のために度々参拝した平将門に新皇の位を授けたのが、大宝八幡宮の巫女と伝えられており、歴史深い神社です。

秋を感じながら、下妻へ出かけてみてはいかがでしょうか。





大宝八幡宮　下妻市大宝667

※1 例祭：その神社で行われる祭の中で最も重要で盛大な祭。
※2 摂社（せっしゃ）：本社に付属し、その祭神と縁の深い神をまつった社。
※3 御幣（ごへい）：神祭用具の一つ。紙または布を切り、細長い木にはさんで垂らしたもの。
※4 勧請（かんじょう）：神仏の分霊を他の場所に移しまつること。

（参考文献）「下妻市史 別編」（下妻市史編さん委員会 編集）
「祭礼行事」（株式会社おうふう 発行　高橋秀雄　加藤健司　茂木栄 編集）
「茨城242社」利益ガイド」（茨城新聞社 発行　今瀬文也 著　茨城新聞社出版局 編集）ほか

「運ぶ」を支え、環境と未来をひらく
ISUZU 茨城いすゞ自動車株式会社
本社／〒310-0063 水戸市五軒町1-2-5 ☎029-225-1215（大代） http://www.ibaraki-isuzu.co.jp